或る失語症者における言葉と身体的所作

—メルロー＝ポンティの言語論と身体論を手がかりとして—

学校教育開発学コース　河　上　燁　子

Speech and body gesture in an aphasic:
Learning from Merleau-Ponty's theory of language and body

Youko KAWAKAMI

The purpose of this paper is to elucidate how an aphasic as "speaking subject" talks and expresses his thoughts. The author explains the relation between an aphasic's speech and his gestures, which has been seldom discussed in aphasia studies as a field of brain research. The author tries to clarify the following case, based upon Merleau-Ponty's view on the language and the body.

From the perspective of "talking in words" and "talking with gestures", the author studies the dialogue among the aphasic, his wife and the author. This study shows the following problems with which the aphasic is confronted in his dialogue: a) difficulty in expressing his thoughts in words, based on "verbal images", particularly when he feels physically tired; b) difficulty in converting his thoughts into gestures; and c) the instability of his thoughts caused by second problem. These problems indicate the close relation between what an aphasic expresses in words and with gestures.

Understanding these problems, it is clear that for a "speaking subject", speech represents how he ties himself to the real world. Consequently, in speech therapy, therapists should show respect for the aphasic's individuality and existence, and focus on their speech and gestures.

目　　次

はじめに
Ⅰ　言葉を語るということ
　A　思惟と言葉との関係
　B　語詞映像に頼って話すということ
　C　語ることに伴う身体的疲労
Ⅱ　身体的所作としての言葉
　A　言葉と身体との間に距離があるということ
　B　思惟を完成させるものとしての言葉
　C　思惟が未完成であることの苦しみ
　D　言葉が遮られるということ
おわりに

はじめに

失語症は，読む・書く・聞く・話すの四分野全てに影響を及ぼす言語障害であり，それゆえ，失語症者自身によって語られ記述された失語症の記録は少ない。だが，失語症者自身による数少ない記録から，失語症者を取り巻くさまざまな問題を知ることができる。

失語症者が抱える諸問題の一つに，医療従事者との関わりの問題がある。例えば，言語聴覚士をはじめとする医療従事者の何気ない言葉は，その言葉を口にした本人の意図を超えて，困難を乗り越えようと苦闘している失語症者やその家族にさらなる深い苦しみや，時には絶望さえも与えうることがある。

例えば，或る失語症者は次のように語っている。「彼は，言語療法士[1]にいわれたことを涙を溜めて訴えていた。僕にも大体のことは想像がつく」[2]，と。聞き手である失語症者のこの言葉から，訴えていた本人だけではなく，その訴えを聞いている者もまた，医療従事者の言葉によって「涙を溜め」る程の苦しみを経験したであろうことが浮かび上がってくる。また別の

失語症者は，或る言語療法士の言葉について，次のように語っている。「『文章を書くまでに，治るでしょうか』と尋ねてみた。彼女の答えも『失語症は絶対に治りません。人間性で補うのです。』だった。冷たい返事だった。(中略)人間性で補う――とはどういうことなのか。わからない。医療従事者としては『模範解答』なのかもしれないが，正直なところ僕の心はズタズタに傷付けられた」[3]，と。「彼女の答えも」というこの失語症者の記述は，彼が複数の医療従事者によって「ズタズタに傷付けられた」経験をしたのではないか，という可能性を我々に示している。

なぜ，医療従事者と失語症者との間にこのような問題が生じてしまうのだろうか。一見すると，医療従事者が医学的専門家としての知見を述べているにすぎないようにも思われる。だが，その背後には，失語症研究に携わる医療従事者に共通するところの，言葉の捉え方における或る問題が潜んでいるのではないだろうか。

これまで，失語研究における失語症者の言葉に関する問題は，言語機能上の問題であったり脳神経の問題に付随して現れる一現象として考察されてきた[4]。失語研究における言語のこのような捉え方は，失語研究が脳研究における脳部位解明の症例から発展してきた研究領域であるという歴史的背景の影響を否定できない。脳研究の一領域として着手されたために，失語研究では，「語る主体」である失語症者自身にとって言葉を語るということがどういうことなのかが研究対象とはされてこなかったのである。そして，このことが，失語症者と医療従事者との間での言葉の捉え方の違いとなっている，と考えられる。

そもそも，我々人間にとって，言葉とは，自らと切り離され，別個の現象として存在しうるようなものではない。メルロー＝ポンティによれば，言語は，「主体がその意味の世界のなかでとる，その位置のとり方を表しているのであり，あるいはむしろ，その位置のとり方そのもの」(316頁，p.225)[5]である，とされる。また，言葉の喪失を認識した瞬間について，失語症者たちは次のように語っている。「完全に空白でした」[6]，「なんで殺してくれなかったんだ　生きていてもしょうがない」[7]，と。彼らの言葉は，言葉が一人の人間の生そのものにいかに深く関わるものであるのかを示唆してくれる。つまり，メルロー＝ポンティが指摘するように，言語が我々の世界の中での「位置のとり方そのもの」であるならば，言語を失うということは，突然に，「ついさっきまでは自明であった世界の意味の地図が崩壊し，羅針盤を失った船のように，茫洋とした暗黒の海に漂」[8]う，ということなのである。なぜならば，言葉とはまさにそれまで自分が生きていた世界との関わり方そのものなのだからである。だが，そのような言葉の在り方が失語研究においては十分に認識されていないために，失語症者と言語聴覚士を中心とする医療従事者との間に何らかの齟齬が生じているのではないだろうか。

筆者が関わりを持たせていただいている失語症者Bさんの奥さんであるC子さんは，かつて次のように語ってくれた。「手足の不自由なら，私があの人の手や足になってあげられる。(中略)でも，あの人の言葉だけは，私が助けることはできない。誰も代わることができないのよ」，と。C子さんの言葉は，人間が言葉を失うことは，失った言葉の代わりに人間性でコミュニケーションを補えばよい，などと代替的に考えて済ませられるようなことではない，ということを示唆している。したがって，失語研究，特に患者である失語症者と直接向かい合う言語療法の場においては，言葉を語ることはその語り手にとっていかなる行為であるのか，ということを十分に考慮する必要があるのではないだろうか。

本稿では，以上に述べた理由から，特にメルロー＝ポンティの言語論と身体論を手がかりとしながら，BさんやC子さんと筆者との関わりを事例とし，失語症者にとって言葉とはいかなるものであるのかについて考察したい。

Ⅰ　言葉を語るということ

A　思惟と言葉との関係

メルロー＝ポンティによれば，思惟は，語る主体にとって一つの表象として存在するものではなく，「はっきりと対象または関係を措定するものではない」(295頁，p.209)。例えば，我々は，友人と会話をするとき，家族と団欒をするとき，言葉の一語一語について思惟した上で初めて言葉を語る，ということはない。それどころか，我々は言葉を「語っているあいだにも思惟しはしない」(295頁，p.209)。なぜならば，言葉を語る人間のその言葉こそが彼の思惟だからである。もしも，言葉を語るという行為が，我々があらかじめ持っている思惟に合致する言葉を語るということにすぎないならば，どうして我々の「思惟がまるで自分を完成させるためであるかのように〔言葉の〕表現へと赴く」(291頁，〔　〕内は訳者，p.206)，ということが生じ

るのだろうか。例えば，作家は，作品を執筆するとき，自分がどのような作品を完成させるのかを正確には知らないまま，筆を進めていく。また，とりとめもない気持ちを抱えているとき，それを言葉にして誰かに話すことによって，自分がどのような気持ちであったのか，何を考えていたのかが初めてわかることがある。思惟と言葉とのこのような関係について，メルロー＝ポンティは次のように述べている。「思惟はなるほど瞬間的に，まるで稲妻の発するような具合に進んでゆく。しかし，そのあとにまだ，それをわがものとする仕事が残っているのであり，表現をつうじてこそ，思惟はわれわれの思惟となるのである」(291頁以下，p.206)。

思惟と言葉との関係は，聴き手においても同様である。我々は，話し手の言葉の一言一句の意味を確かめながら聞く，ということをしない。もしも，我々が，話し手の言葉や，あるいは話し手のことを記述したり，描写しようとするならば，その瞬間から，対話における我々の「語りかけは止まってしま」[9]う。

我々が言葉を語りかけるとき，対話に没頭すれば没頭するほどに，その表現は，まさに「その場で作られ，文章は少しも思惟が働かないで理解されてしまっており，意味は到るところに現前していると同時に，またそれ自体としてはどこにも措定される」(296頁，p.209)ことはないものとなる。そのようなとき，語は，「あたかも私の背後にある事物のように，あるいは私の家をとりまく町の拡がりのように，私の背後にある」のであって，「それらを私は考慮に入れたり，当てにしたりはするけれども，それらについてどんな＜語詞映像＞ももちはしない」(296頁，p 209)。したがって，通常，我々が言葉を語り，言葉を聴くとき，語り・語られる言葉の一語一語をそれぞれ「語詞映像」(images verbales)(286頁，p.203)として再生する必要はない。「私が語を知ってそれを発音するためには，その語を私の心に表象する必要はなく，その語の分節的および音声的本質を私の身体の可能な使用法の一つ，転調の一つとして所有すれば十分」(297頁，p.210)なのである。

だが，私の身体が語を表現することができない場合，我々はどのようにして言葉を語り，またそのことによってどのような経験をするのだろうか。以下，失語症者Ｂさんの事例を手がかりに，これらのことを考察していきたい。

Ｂ　語詞映像に頼って話すということ

身体が語を表現することが出来ないとき，どのような経験を強いられるのかを考察するため，まず次の事例をとり上げたい。

【XXX3年９月７日】「Ｂさん。どこに行かれるんですか？」「う･･･ん，えっと･･･」，私の問いに答えながら，そのままＢさんは杖をついてゴミ箱を足元へと引き寄せた。「これを･･･えっとなんだっけ。庭でね･･･」「ゴミを庭で燃やすんですか？」，と私が尋ねると，「そう」，とＢさんが頷きながら言い，手から杖を放し，ゴミ箱を持とうと少し身を屈めた。サイズの大きいゴミ箱を杖と一緒に持つことは大変そうに思えた。「じゃあ，お手伝いしましょうか？」「そう？･･･ええと。じゃあ。これ，ああ，これって言ってもわからないか･･･。ええっと･･･これくらいの…」そう言いながら，ゴミ箱から身を上げたＢさんは，左手で空中に四角形を描き出した。「四角？」「うーん･･･し・かく･･･じゃなくて，ええと。これくらいの･･･」。そう言ってＢさんは先程よりも幾分か小さめの四角形を再び空中に描いた。だが，思っているものと形が微妙に違ったのか，それとも私の表情からわかっていないと判断したのだろうか。Ｂさんは，ふと思い出したように「あ，これくらいの大きさなんだけど」，と言いながら，上着のポケットから名刺入れを取り出した。名刺入れを取り出して，「これくらいの･･･」，と私に大きさを示していると，Ｂさんの頭の中のイメージとその対象となる語が突然にすとんと一致したのだろうか。先程までよりもはるかに明瞭な声で，Ｂさんは言った。「あ，マッチ。ま・マッチです。それがいるんです」。

Ａで述べたように，我々が語を知っており，その語を発音するためには，その語の文節的および音声的本質を私の身体の可能な使用法の一つとして，転調の一つとして所有すれば，それで十分である。だが，「『ええっと･･･これくらいの･･･』そう言いながら，ゴミ箱から身を上げたＢさんは，左手で空中に四角形を描き出した」，ということから，Ｂさんは，「マッチ」という語を発音するときであっても，「マッチ」という語を発音するために，語詞映像を構成し直さなければならない，ということが窺える。

語詞映像に頼って言葉を語るということは一体どういうことなのだろうか。このことをより具体的に考察するために，我々が歩行する場合についてまず考えてみたい。

我々は，歩くとき，歩くということを意識すること

も，歩行を支える足の筋肉の働きを生理学的・解剖学的に理解しながら歩く，ということもしない。我々は，己れの身体が存在し，その身体を動かす外的空間が存在してさえいれば，歩くことができる。

だが，或る日，私が高熱を出したとする。高熱を出している体は，私にとって，いつもの私の身体ではない。筋肉の一つひとつが悲鳴をあげているように鈍い痛みを放つとき，私は，自分の身体が生理学的・解剖学的に言うところの何億もの細胞の総体として存在しているだけの，あたかも微妙なバランスの上に脆くも一つの総体として成り立っているものにすぎないことを感じる。椅子からベッドへ移るときの，たった数歩の距離を歩くことにさえ，私にはまるで水飴の中を歩いているかのような違和感が伴う。普段は意識することもない歩行は，まさに「歩く」という意志をもって，足を持ち上げ，足を下ろすと同時に，またもう一方の足を持ち上げるという作業を心に思い浮かべることによって，初めて可能となる。そのようなとき，私の身体は私にとって，私の自由を縛る，しかし外すことのかなわない錘そのものである。

では，我々が言葉を語るということはどういうことなのだろうか。歩行するときと同様に，我々は，言葉を語るとき，その語を心に表象する必要もなければ，その文法的構造を知識として知っている必要もない。だが，失語症者であるＢさんが言葉を語るとき，Ｂさんは，あたかも私の身体が発熱しているときと同様のことを経験している，と考えられる。

表現によって思惟を我がものとすることに困難があるＢさんにとって，語詞映像はあたかも，語という錨へとたどりつくための，暗闇の中のほの暗いランプの光のようなものである。ゆらゆらとゆれる光は暗く，その光をあちらこちらへと向けながら，どこにあるかもわからない錨へとたどりつくことは，容易なことではないだろう。

「『あ，これくらいの大きさなんだけど』，と言いながら，上着のポケットから名刺入れを取り出した」，ということから，「マッチ」という言葉を発音するためには，Ｂさんは，イメージを表象しなければならない，ということがわかる。そして，その表象に一致する言葉へとたどりつくためには，身体的な身振りや手振りをも頼りにしなければならないことが，上述の事例からは窺える。Ｂさんにとって言葉を発するということは，精神的にも肉体的にも多大なる疲労が伴うものであることは，想像に難くない。

言葉に不自由のない我々であっても，語詞映像に基づいて言葉を一つひとつ語るのであれば，それは大変な苦痛であるだろう。例えば，重要な会議の場で，私が発表を30分間担当するとしよう。発表し終わった後に私が疲れていることは容易に想像がつく。この疲労感は，普段は意識して話すことのない「言葉」からその身を意識的に切り離しながら語ることによって生じたものであろう。

言葉に不自由のない我々でも，言葉を常に意識して話すことは，短時間であっても疲労となる。常に言葉を意識しながら話さざるをえない失語症者にとって，その身体的疲労はどれほどのものなのだろうか。

Ｃ　語ることに伴う身体的疲労

Ｂさんは，奥さんであるＣ子さん以外の人と３時間以上連続して対話をしたりすると，休憩をはさんで身体を休むことができない場合，身体が疲れきって言葉が出てこなくなる，ということがある。

【XXX3年11月29日】「ええと……ちょっと，うーん，……だめだな。すみません」。非常に疲れたような小さな弱々しい声が電話の向こうでかすかにしたと思った次の瞬間，Ｂさんが受話器を置く音が耳に響いてきた。呼びかけてみたが応答がない。そのまま受話器を持ちながら待っていると，Ｃ子さんが慌てて電話口に出てきた。「もしもし，突然ごめんなさいね。主人，疲れていて，今，上にいっちゃったのよ」。「いえ大丈夫です。ただ，ものすごく疲れた声だったんですけど，今日もしかして発作を起こしたとか，何かあったんですか？」。「いえ，そういうのではなくてね。今日のお昼に，彼の学生時代の知り合いやお友達が来てくれていたの。それで皆さんがついさっき〔夜八時過ぎ〕までいらしたから。それで，ちょっと疲れてしまったのよ」。「ああ，そうだったんですか」。「(中略)やっぱり身体の方がね。２，３時間おきに休憩をいれないと，〔身体が〕もたないのよ。普通の人みたいに何時間も人に会うということが，今の彼にはもうできないのよね。ただ，遠方から来てくれている人の都合や，せっかく楽しい時間を過ごしていることを考えると，まあ色々とね。彼一人が別室に行くというのも辛いだろうし」。

この事例から，失語症であるＢさんにとって，言葉を話し続けることが，いかに体力を奪うものであるのかがわかる。学生時代の親しい友人との語らいであっても，Ｂさんにとって，言葉に不自由のない我々と同じように話し続けることには，負担が伴うのである。

II　身体的所作としての言葉

A　言葉と身体との間に距離があるということ

では，Bさんが言葉を語ることには精神的疲労のみならず身体的疲労まで伴うという事態は，どうして生じてしまうのだろうか。このことを考察する前に，Bさんの身体的所作に注目したい。

【XXX3年10月21日】「ええと，……。…こう，…ええと。こう。…ええと……。1，2，3…3個……えっと，ちがうな。ええと，1，2，3…」，とBさんが数字を口にした。「3個ですか？」Bさんが1，2，3，と数字を列挙していたので，（中略）まず物の個数として，3個と言ってみた。「そうじゃなくて…」，とBさんは困ったような声で否定した。そこで，3という数字に関連しそうなものをとりあえず列挙してみれば，Bさんの言いたいことがわかるかもしれないと考え，さらに尋ねてみた。「えっと，数字の3？それとも時間の3？」「もう，だから，そうではなくて…。もう，ちょっと…。えっと，1，2，3と…ああ，だめだ。だめになってしまった。だから，こう…，えっと，あなたが，するから…消えちゃった」。私の言葉に対して，Bさんは口を押さえ，困ったように顔をしかめ，そのまま黙ってしまった。

Bさんが口にした言葉は，Bさんが言おうとしている言葉に関連するものだろう，と推測した結果，筆者は，連想ゲームのように，「3」という数字から思いつく言葉を次々とBさんに提示していった。だが，言葉を矢継ぎ早に提示したことは，むしろ，Bさんが言おうとしていた言葉そのものをBさんから奪う，という結果になってしまった。

他者から言葉を提示されることが，Bさんの言葉を奪ってしまう，という結果になってしまったのはなぜだろうか。

数字を口にしたとき，Bさんは，口の中から言葉をすくい出そうとするかのように，親指と人差し指で口を押し開けようとしていた。そして，左手を何度も口に近づけては，口から何かを引き出そうとするかのように，手を口から遠ざけた。この事例の場合以外にも，Bさんは，言葉が出てこない状態になったときに，しばしば，左手で口から言葉をすくい出すような仕草をしている。このことは一体どういうことなのだろうか。

メルロー＝ポンティによれば，我々の身体は，「どこから自分にもたらされたわけでもない一つの＜意味＞を自分自身で分泌して，それを自分の物質的周囲に投げ出し，それを受肉した他の主体たちへと伝達する」(323頁，p.229)，とされる。そのような我々の身体が，意味を自ら分泌しながら自分の思惟や意図を表現するためには，我々の「身体はみずから思惟や意図になり切らねばならない」(323頁，p.229-p.230)。

Bさんは，言葉がうまく出てこないとき，身体のなかから言葉を引き出すかのような所作をする。このことは，まさに，Bさんが自らの身体を言葉や思惟になりきらせようとしていることの現われなのではないだろうか。言葉に不自由のない我々は，意識することもなく，自らの身体を思惟や意図になりきらせることができる。だが，失語症であるBさんの場合には，自らの身体を思惟になりきらせようとする瞬間に，言葉が出てこないことによって，身体を思惟になりきらせることが妨げられる。そのために，Bさんは，実際に手を上下させたり，口元に手を近づけたりするという具体的な身体的所作をとることによって，身体を思惟になりきらせようと試みているのではないだろうか。

そうであるならば，「身体こそがみずから示し，身体こそがみずから語る」(323頁，p.230)ために，身体を思惟になりきらせようとして，具体的な身体的所作を試みているBさんに対して，他者が言葉を次々と提示することは，Bさんの身体的所作を妨げてしまうことになる。そして，身体的所作をとることが妨げられるということは，Bさんにとっては，自分の思惟や意図を表現することを妨げられる，ということになるのである。「こう…，えっと，あなたが，するから…消えちゃった」，というBさんの言葉は，他者からの言葉の提示が，Bさんが具体的な身体的所作を行うことを妨げてしまった結果，身体が思惟になりきることができなかった，ということを如実に示しているのではないだろうか。

言葉に不自由のない我々は，瞬時に身体を思惟になりきらせることができる。だが，Bさんは，失語症であるために，瞬時に身体を思惟になりきらせることができない。失語症によって，Bさんの身体と思惟との間には，本来ならば存在しない距離が存在し，この距離が，Bさんが言葉を語るうえでの困難さとなっているのではないだろうか。

B　思惟を完成させるものとしての言葉

もしも，思惟が思惟のみで存在するのであれば，つまり思惟が思惟している自らに対して，あるいは他者に対して言語化されることなく，ただ思惟として存在

しているだけであるならば，「そんな思惟は生れるや否や，たちまち無意識に陥ってしまう」(291頁，p.206)。思惟の主体である我々においても，思惟は無意識におかれる。そのため，思惟は思惟として認識されることもないままに，「自分にたいしてさえ存在しないということになってしまう」(291頁，p.206)のである。

では，言葉が思惟を思惟として支えるものであるならば，失語症者であるＢさんにとって言葉が出ないということは，一体どういうことなのだろうか。

既述した【XXX3年10月21日】の事例にあるＢさんの，「もう，だから，そうではなくて･･･。１，２，３と･･･ああ，だめだ。だめになってしまった」，という言葉は，失語症者が抱えている問題を，思惟と一致するところの言葉が単に出てこない，という問題に解消してしまうことはあまりにも一面的な見方でしかないことを示している。表象や思惟と言葉との一致だけではなく，身体を思惟になりきらせるということ，つまり，思惟を自らの思惟とすることに困難がある，ということが，まさに身体的所作を伴ったＢさんのこの言葉によって語り出されている。

思惟するところの主体である我々が，自分の思惟を思惟として自ら認識するには，思惟が言葉によって表現されることが必要である。思惟と言葉とのこの関係について，メルロー＝ポンティは次のように言う。

> 薄暗がりのなかでわたしが或る対象に目を停めて，「これはブラシだ」と言うとき，わたしの心のなかにブラシの概念があって，そのもとにわたしはその対象を包摂し，一方その概念は＜ブラシ＞という語としばしば繰り返される連合によって結びつけられもする，といった具合ではなくて，むしろ，語自体が意味を身に帯びており，それを対象に当て嵌めることによってわたしは対象を捉えたことを意識するのである。(292頁，p.206)

メルロー＝ポンティによれば，「子どもにとっては，対象はその名前が告げられたときにはじめて認識されたことになる」(292頁，p.206)，とされる。すなわち，例えば，車を見ていた子どもが，或る日，生まれて初めて「ブーブー」という言葉を発したとき，その瞬間に子どもは「ブーブー」であるところの「車」を認識するのである。確かにその子どもは，「ブーブー」という語を発する前から，幾度となく車を目にしていたかもしれない。だが，そのときの車は，あたかも我々が何かを「見る」ときと同様，子どもにとってはその子どもの周りに広がる一風景と同じなのである。

すなわち，或る対象を「見る」とは，「対象のなかに身を沈めることであり，諸対象は一つの体系を形成していて，そのなかでは対象の一つが現れるためには他の諸対象が身を隠さなければならぬ」(126頁，p.78)，ということである。だが，「見る」ことによって，或る対象が地における図として浮かび上がっているとき，地は「けっしてそこに在ることをやめることはない」(127頁，p.78)。つまり，私が自分のまなざしを風景の或る一部のうえに据えたとき，私がまなざしているその部分は，「自己を生動化し，自己を展開」するその一方で，他の諸対象の方は，「周縁へと退き，眠り込む」(127頁，p.78)。しかしながら，私によってまなざされていない部分は，「けっしてそこに在ることをやめることはない」。そのため，もし，私がそれまでまなざしていた部分の周縁を新たにまなざしたならば，たちどころに，それまで周縁であった対象が図として浮かび上がってくる。そして，それまでまなざしていた部分をも含む諸対象の方は，地として退き，眠り込むのである。

我々の「まなざし」における対象－地平の構造についてのこうした考察は，言葉と思惟との関係にも同じようにあてはまるのではないだろうか。つまり，「ブーブー」という言葉を発することによって，それまでは子どもの世界に風景として存在していたものが，意味を備えた対象として現れてくるのである。「ブーブー」であるものが，生動化され，展開されるということは，「ブーブー」という言葉が表現されることによって，初めて可能となるのである。

Ｂさんにおいても，言葉が出てこないということは，思惟と一致する言葉が単に出てこない，ということではない。それゆえ，いわゆる「言葉探し」によって正しい言葉を探し出せばそれでＢさんの問題が解決する，ということにはならない。なぜならば，表現を通してこそ，思惟は我々の思惟となるからである。そもそも，メルロー＝ポンティが言うように，「事物の命名は，認識のあとになってもたらされるのではなくて，それはまさに認識そのもの」である(292頁，p.206)。言いかえるならば，思惟と言葉は，あたかも互いに包み合うように存在しているのであり，そうである以上，やはり，言葉が出てこないということに潜んでいるＢさんの問題は，思惟や表象に一致する語をうまく見つけ出すことができない，ということに還元することはできないのである。

或る対象を「見る」とき，我々は，「その対象のなかにどっかりと錨をおろす」(126頁，p.78)ことによって，その対象をまなざす。そして，言葉を語るということ

は，まさにこの「どっかりと錨をおろす」，ということと同様なのではないだろうか。表現することを通して，我々は，風景のように存在している自らの思惟に対して，錨をおろし，思惟を我がものとしていく。それゆえに，「言葉は，言葉を語る者にとって，すでにでき上っている思想を翻訳するものではなく，それを完成するもの」(293頁，p.207)なのである。

したがって，言葉を語ることが困難な状態にあるＢさんにとっては，言葉が出てこないということは，表現を通して思惟を我がものとすることができない，つまり，思惟を完成させることができない状況に身を置く，ということである。言葉という表現によって錨をおろされていない思惟は，波間を不安定にゆれる船のように，安定することなく絶えず彷徨わなければならない。言葉に不自由のない我々でも，自分の気持ちを思うように適切に表現できないとき，苛立ちを感じたり，歯がゆさを覚えたりする。言葉を表現できないことによって思惟を我がものとすることができないために絶えず彷徨していることを，Ｂさんは，【XXX1年６月14日】に筆者に対し，次のように語ってくれたことがあった。「そうじゃなくて･･･，あなたもわかって･･･です。ええと･･･。こう。･･･だから，うーん。こういう。ああ･･･こう。だめだな。こう･･････。ああ，もう。駄目になってるけど，でもわたしはわかってるんです。けど，だめだね。･･････わからない？」，と。思惟を自らに対し確固たるものにできず，その結果，思惟そのものが曖昧となって不安定な状況に置かれつづけるということの，さらには，自分ではわかっていながらも，言葉を表現することができないために，思惟を我がものにすることができずに「駄目になって」いくことの苦しみと焦燥感は一体どれほど大きいのだろうか。

Ｃ　思惟が未完成であることの苦しみ

すでに述べたように，失語症者が語詞映像に頼らざるをえない事態に陥っているときに，他者と共にいわゆる「言葉探し」によって正しい言葉を探し出しても，失語症者の問題が解決するわけではない。そうである以上，「言葉探し」によって失語症者が言葉を語ろうとすることは，また，言葉を見つけ出そうとして苦闘することは，失語症者にとっては，一瞬にして海原のどこかに消え去ってしまう船のように，あるいは空から降ってくる雪が手に触れた瞬間に融けてしまうように，不安定に揺れ動く自らの思惟を自分自身に対して留めおき，思惟を我がものとしようとする作業であり，またそうしようとして苦闘することである，と言えるのではないだろうか。換言すると，言葉が出てこないときには，思惟もまた曖昧となり消えてしまうのである。そして，その結果，自分が何をしようとしているのかがわからなくなってしまうという状況に陥ることである，と考えられる。次の事例からも，言葉が出ないために，思惟している主体であるところのＢさん自身にとって思惟が不明瞭なものになってしまう場合がある，ということが明らかとなる。

【XXX1年４月３日】言語療法へ行く準備をしていたＢさんが何かを呟いていた。(中略)Ｂさんは頭に手をやったまま，呆然としているかのように，数秒の間立ちつくしていた。「どうなさったんですか？」，と尋ねても，そのまま前頭部を左手で抱え込むようにして立ったままだった。私の言葉が聞こえていないかのように，Ｂさんは，そのまま何も応えず，同じ姿勢のまま立ちつくしていた。Ｂさんの時間だけが，周囲から浮き上がって，止まってしまっているかのようだった。そんなＢさんを見て，病室から出て行くとき，Ｂさんがいつも身なりを整えていることをふと思い出した。「あの，もしかして櫛を探されているんですか？」私の言葉を聞くと，Ｂさんは我にかえったかのように，言った。「ああ。そう･･･。えっと，これを･･･しようと思って。えっと，か・かーみ。髪をしようと思ったんだ。でも，ないんです」。Ｂさんが手を動かした先を見ると，Ｂさんのベッド上の机の上の藤籠の中にいつも置かれていた櫛が，見当たらなかった。

我々も，或ることをしようと行動を起こしたまさにその瞬間，自分が何をしようとしていたのかを思い出せなくなってしまう，という経験をすることがある。例えば，机の前に座っていた私は，部屋の隅にある本棚に置いてある一冊の本を読もう，と考える。そこで，その本を手に取るために，私は椅子から立ち上がり，本棚へと足を向ける。足を一歩踏み出そうとしたまさにその瞬間，ふと，私は自分が何のために足をそちらに向けようとしているのかがわからなくなってしまった。私の身体は，瞬時に，凍りついたようにその動きを止めてしまう。私は，自分がどうしようと思ったのかがわからない，ということに困惑し，その空白感によって立ちすくむ。だが，幸いにも，一瞬の空白感を経験したのちに，「ああ，そうだ。本を取ろうと思ったんだ」，と思い出すことができるならば，私の足は自然に本棚の方向へとその一歩を踏み出すことができる。

しかしながら，何も思い出すことができない場合，私の身体は棒のようにその場に立ちつくしたままになる。私は頭に手をあて，自分が何をしようとしたのかを懸命に思い出そうとする。そして，空白化した自分の思惟を再び獲得するために，私は先ほど自分がとった行動を，その記憶に従い，再現しようと試みる。私は，再び机の前に座ったのちに，先程と全く同じように椅子から立ち上がり，一歩を踏み出す。自らの身体で思惟になりきろうとすることによって，一瞬にしてかき消えてしまった自分の思惟を再び我がものにしようと，必死に格闘するのである。

この格闘によって，運よく思惟を我がものとすることができれば幸いだが，それがかなわない場合，私は自分自身の考えが自分にわからない，という不安定な落着かない状態に身を置くことになる。そして，そのような状態に身を置くとき，我々は，思わず頭をかきむしりたくなるような居心地の悪さや焦燥感を感じずにはいられない。

Bさんが，何かを呟いたとき，おそらくは「櫛」という言葉を語ろうとしたのではないかと推測できるが，「櫛」という言葉が出てこなかったことによって，言語療法に向かう前に髪に櫛を入れようという思惟を，Bさんは，自らに対して確固としたものにすることができない，という不安定な状態に晒されていたのである。

言葉が出てこないということは，単にその言葉によって想定される対象を思い出せないということではなく，まさに，自分自身の身体が凍りついたように，動くことさえできないような不安定な状況に無防備に晒されつづける，ということなのではないだろうか。

D　言葉が遮られるということ

言葉が出てこないということは，不安定な状態に身体を晒すということである。そのような状態の中，Bさんは自己に対し，自らの思惟を確固たるものにすることの困難さに苦しんでいる。言葉に不自由のない我々は，言葉が他者によって遮られたとしても，自己の思惟を自らに対し確固としたものにできる以上，他者の言葉によって自己の思惟がかき消されてしまうことはない。だが，Bさんは，思惟を身体化できないために，他者の何気ない言葉によってさえ，その思惟がかき消されてしまう，という経験をしているようである。

【XXX3年9月6日】椅子に腰をかけてテレビを見ていたBさんが，ふと身体を起こしながら何かを言った。「ええと･･･。あの。えっと･･･ぇ･･･てぇ。･･･」。そして，テレビの方に指をさした。「なに？テレビ？」，とC子さんがBさんに尋ねた。「そうじゃなくて，･･･えっと」。「なに？チャンネルを変えるの？」。Bさんは苦い顔をして顔をしかめた。「もう，だから，ちょっと･･･」。そう言いながら，Bさんは手でこちらの言葉を押しとどめるように，手をかざした。「なに？音をもっと上げる？それとも，テレビを消す？」。「･････････。あ，だめだ。そ・そう，じゃなかった，けど･･･。きーみ・が，こ・お，言うから･･･。もう」。苛立ったようにそう言うと，Bさんは再び椅子の背にもたれかかり，目を閉じてしまった。

C子さんは，Bさんが椅子から身を起こし，テレビを指差して何かを言おうとしているBさんの様子を見たことから，C子さん自身の想定に基づき，Bさんに言葉を語りかけた。

日常生活において，我々が他者との共同作業をするために，他者が何を考えているのかを考えること，すなわち他者の考えを想定する，ということは自然なことである。我々は日常において，自己にとっての他者の存在を想定しながら，他者との関係を育んでいる。「いわゆる『裏を読む』，『裏の裏を読む』といった腹のさぐり合いの要素が多く含まれている競技が非常に人間臭いのと同様，レインによって記述されている人間『模様』も人間同士を結びつけている『きずな』や『結ぼれ』ともなっている」[10]ように，我々は，他者の考えを自然に想定しながら生活している。

だが，言葉に不自由のない我々にとっては，ごく自然なことである，他者の考えを想定するという仕方で語りかけられることさえもが，Bさんにとっては，Bさんの言葉を奪いかねないものとなりうる，ということがBさんの言葉から窺える。なぜならば，言葉を語るということ，言いかえるならば，表現行為そのものでもある言語行為は，「私たちが自分の思想を他人に伝達するためにだけ訴えかける二次的な操作といったものではなく，そうしないでは無言のままでしか私たちに現前しないところの意味を，私たちが収得し獲得してゆく操作」[11]だからである。

メルロー＝ポンティがいうように，「主体は単に他人のために表現するだけではなく，自分の志向しているものをみずから知るためにも表現する」のであって，「言語活動が或る空虚でしかない一つの意味的志向を受肉しようとするとすれば，それは(中略)一体何が欠如し欠損しているかをみずから知らんがため」[12]なのである。我々は言葉を語り，表現することによって，自らが語ろうとしていたことを了解する。そうである

ならば，言葉が遮られ，表現行為を中断させられるということは，思考そのものもまた，自分自身に意識化されることなく，不安定なままに中断させられてしまう，ということになる。「必ずしも，語っている私たち自身の方が，私たちの言葉を聞いている人たち以上に，自分の表現したことを知っているわけではない」[13]。こうしたことは，我々が曖昧模糊とした感情を，とりあえずであっても思いつくままに表現することによって，初めて，その曖昧模糊とした感情が何であったのかを知る，という経験をもつことからも明らかである。

Ｂさんの言葉が詰まったとき，他者が連想ゲームのように言葉を発すると，その言葉によって新たな言葉がＢさんに引き出されることがある一方で，他者によって言葉を羅列されることで，むしろ，Ｂさんが今まさに表現しようとしていた言葉そのものが消えてしまうという経験をしていることが，Ｂさんの発する多くの言葉から窺える。以下の言葉は，筆者が連想ゲームのように言葉を述べたり，あるいはＢさんの言葉を先取りしてしまったことに対して，Ｂさんが発した言葉を筆者の記録から抜粋したものである。

「き・きみが，こ・う，いーう，から……だから，わからなくなったじゃないか」。

「ああ，もう，だめになった･･･」。

「ぼくは，わかってるんだよ。……なのに，こ，この，かー・のじょ，が，こう，……から，･･･だめだよ。もう」。

「もう，･･･いってるんだから，〔顔をしかめて，黙るように，と手を振った。〕……ああ，もう，わかってたのに，･･･ああ，もうだめ」。

これらの言葉から，他者の言葉によってＢさんの表現行為が阻害されることにより，言葉に住み込んでいる意味がＢさん自身に明らかにされることのないまま，不安定な状態にＢさんが晒されつづけている，ということが明らかになるのではないだろうか。

おわりに

本稿では，失語症者が抱える諸問題のごく一部を明らかにしたにすぎない。失語症者が抱える言葉の問題とは，事物や思考内容に一致する言葉をラベリングすることができない，などといった仕方で捉えられる問題なのではなく，語る主体自身が自らの言葉の身体化を阻害されることによって生じてくる問題である。さらにまた，或る一人の人間の世界との関わり合いの仕方そのものに関わる問題でもある。したがって，失語症のリハビリテーションを行う言語療法では，失語症者が失ったとされる言葉とは，その失語症者がそれまで生きてきた世界との関わりの仕方そのものであることに留意した上で，個々の失語症者の生に即した言語療法を行う途を模索していくことが求められるのではないだろうか。

（指導教官　中田基昭教授）

（付記）本稿は2002年度に東京大学教育学研究科へ提出した筆者の修士学位請求論文「語る主体としての身体と言葉」の一部を加筆・修正したものである。修士論文にだけではなく，本稿でも事例として使わせていただくことを快く承諾してくださったＢさんとＣ子さんに，この場を借りて感謝の言葉を述べさせていただきます。

注

1）言語聴覚士法の制定(1997)によって，従来使用されていた言語療法士・スピーチセラピスト等の名称は言語聴覚士に統一された。

2）永倉万治 『大復活』 講談社 1997 p.186

3）牧太郎 『新聞記者として死にたい 「障害」は個性だ』 中央公論社 1998 p.134-p.135

4）失語症研究が脳部位同定とその機能解明の手段として始められたという歴史的経緯の影響から，失語症学における古典的言語論としての経験論・知性論，そして現代の情報処理アプローチ理論のいずれにおいても，語る主体と言葉とが切り離されて言葉だけが捉えられている，という問題を孕んでいる。

5）本稿では，以下，メルロー＝ポンティの『知覚の現象学Ⅰ』 竹内芳郎・小木貞孝訳 みすず書房 1967，*M. Merleau-Ponty "Phenomenology of Perception" Colin Smith Routledge & Kegan Paul 1962*からの引用に限り，引用文の後の（ ）内に邦訳文と英訳文の頁数のみを併記することにより，その引用箇所を指示する。なお，引用に際しては，原則として邦訳本の訳を使わせていただいたが，文章構成上の理由等から，その一部を変えた所もある。

6）スージー・パー他 『失語症をもって生きる――イギリスの脳卒中体験者50人の証言』 遠藤尚志訳 筒井書房 1998 p.46

7）山田一彰 『失語症の歌 手記・脳外科患者の復権』 ぶどう社 1987 p.14-p.15

8）佐野洋子・加藤正弘 『脳が言葉を取り戻すとき 失語症のカルテから』 日本放送出版会 1998 p.19

9）ブーバー，M 『我と汝・対話』 植田重雄訳 岩波文庫 1979 p.186

10）中田基昭 『教育の現象学』 川島書店 1996 p.92

11）メルロー＝ポンティ，M. 「言語の現象学について」『言語の現象学』 木田元他訳 みすず書房 2001 p.14

12）同書 p.14

13)同書 p.16